



発行所
西原町役場
〒903-01
西原町字嘉手苅112番地
電話 (09894)-5-4533
印刷
栄光堂印刷

町の世帯・人口
(昭和58年9月末現在)
世帯数 4,877世帯
人口 18,749人
男 9,451人
女 9,298人
9月の人口移動
出生 22人 死亡 4件
転入 109人 転出 62人
婚姻 5件 離婚 5件

しめていきますか
心のカギと家のカギ

新事務担任者決まる

昭和五十八年八月三十日付で事務担任者の事務委託契約が満了したのに伴い、各行政区では、新しい事務担任者の選出が行われたがこのほど全区が出揃い、町との間に事務委託契約が結ばれた。

事務担任者は、町と区民とを結び町行政を円滑にするために町行政のいろいろな委託事務をうけながら行政区の自治活動の中心的役割を果たす方であり、町と区との間に事務委託契約が結ばれた。



一区
与那嶺栄幸
①幸地二二三
②五九才



二区
比嘉 貞祐
①棚原二八八
②五二才



三区
島袋 成喜
①森川四三二
②三九才



四区
安里 寛盛
①上原二六一
②三九才



五区
大浜 徳進
①翁長四八一
②六四才



六区
糸数 昌幸
①翁長六五
②三九才



七区
長嶺 由光
①津花波一九
②五一才



八区
外間 惟正
①小那覇三四
②四五才



九区
新城 良一
①与那城三三
②五五才



十区
岸本 恵市
①兼久六〇一
②六一才



十一区
城間 源市
①与那城八八
②七〇才



十二区
崎原 裕右
①我謝二四一
②四五才



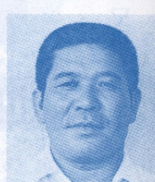
十三区
呉屋 賀真
①我謝四三〇
②六一才



十四区
与那城盛弘
①安室五一
②六〇才



十五区
山入端立美
①小波津二三三
②四六才



十六区
呉屋 定子
①呉屋二二
②四七才

米寿の方々十六名に

町から記念品贈呈

九月十二日、今年町内で米寿（トカチ）を迎えられた方々十六名に町と町老人クラブ連合会から記念品が贈られた。

その日、宮平町長、呉屋町老人クラブ会長をはじめ町福祉課職員が各家を回り、記念品を手渡し、米寿のお喜びを祝うとともに米寿の通り。

を迎えた方々とにぎやかな懇談をし、益々健康で長生きされるようにと励ました。今年の米寿祝の方は、明治二十九年（西暦一九〇六年）申年生れ。数え年で八十八歳である。尚、米寿を迎えられた方々は次の通り。



与那嶺カメ
幸地 67



与那嶺ウシ
幸地 215



宮里 ヨシ
棚原 14



宮里 太郎
棚原 14



糸嶺マカト
幸地 975-4



与那嶺ツル
幸地 901



新川 カメ
嘉手苅 105



宇栄原カマデ
小橋川 133-12



宮城 弘江
小橋川 40



糸数 三良
翁長 64



大城 孝敏
兼久 100



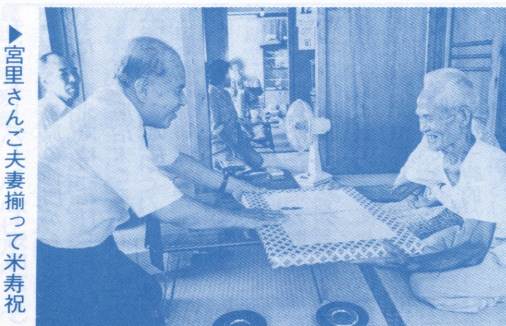
名嘉真宣松
兼久 1



玉城 カメ
小那覇 275



玉城 ナヘ
嘉手苅 20



宮里さんご夫妻揃って米寿祝



与那嶺三良
小波津 162



仲村 起照
我謝 8-24

町職員人事異動

昭和五十八年九月十七日付で保除年金課長の仲宗根政栄さんが勧



仲宗根政栄さん

道路上に倒れているさとうきびの適正管理にご協力を

町産業課

台風等の影響もあって町内の県道、町道及び生活道路の一部でさとうきびが道路にはみだし、道路管理上支障をきたしています。特に通学路では、児童生徒の交通安全面から問題視されております。つきましては、農家の皆さんに支柱等をたてて通行の邪魔にならないよう対策を講じて下さいますようお願い致します。

コンピューター買換に伴う事務処理についてのお断り

町水道課

現在のコンピューターは耐用年数も切れ、老朽化し又業務量の増加に伴い十月分から新しいコンピューターにより、漢字を採用し調定するよう事務を進めております。その事務処理に当って次のような点が発生しておりますので、需要者の皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

尚、移行後に何か疑問な点がありましたら町水道課（電話五二四九三四）へお問い合わせ下さい。

一 片仮名から漢字に変える場合、旧漢字等は当用漢字又は略字等になりました。

二 特殊な漢字については、片仮名で表示しました。

三 給水契約者名義で事務的に処理可能なものは、現在の施設の所有者又は使用者に変更したのもある。

四 地番と住所表示が不一致するものについて事務的に訂正できるものは訂正しました。



▲安室の全景、昭和56年12月に上空から撮影。



▲手前は桃原の全景、昭和56年12月に上空から撮影。

はじめに

十四区は、安室、桃原、池田を主体に小波津の一部からなり、一六二世帯、六九八人(今年八月末)を有し、面積が一・九六平方キロメートルで二番目に大きい行政区である。宅地開発はあまり進まないで昔ながらの思かげを残す家並が多い。安室六十六世帯(二七〇人)、桃原三十一世帯(一五九人)、池田六十四世帯(二二八二人)、小波津二世帯(十人)である。昭和十九年には、安室五十五世帯(二四五人)、桃原六十世帯(二四三人)、池田六十五世帯(三四八人)であった。

安室は、運玉森の北斜面のふもとにあるこじんまりとした静かな部落である。居住地は、安室自治公民館を中心にして甚盤目状で整然としている。そのことは移動村落であり、安室と呼ばれるようになったのは、一六七三年以前である。現在の集落が形成される前は、佐久真の嶽周辺に十二世紀〜十三世紀頃から住んでいた。そのことは、その周辺から弁蓮模様の青磁器や須恵器などが出土したことから

らもうかがえる。

桃原は、上ヌ毛の南斜面のふもとから平坦部にかけてひろがるのどかな部落である。沖繩戦では、百十四人以上の犠牲者が出ており、今でも部落内はあちこちに空き屋敷がある。以前は部落の東側にある森「桃原しじ」(古島ともいう)の北斜面のふもとに集落があったが、家が西向であったため風水(フンシ)が悪いということとで現在のところ部落が移動した。その年代は定かではないが、一六七三年後であろう。古島の前に部落の南側で恩玉ノ嶽が位置する恩玉原周辺に古代マキヨがあったと思われる。

池田は、運玉森の北側ふもとと幸地の刻時森との谷間に住宅が点在している。集落の中心地は、旧桃原の上池田と旧安室の西佐明一帯である。廃藩置県前後、首里からここに移り住んだ土族が多く、桃原、安室、幸地の屋敷であった。昭和七年にそれら三つの屋敷が統合して池田をつくった。

位置

十四区は、本町の南西部に位置

おらがまち(十五)

十四区＝安室、桃原、池田

安室

南に運玉森、東に安室高森、中央部に御茶多理森、ウチュー森の高地があり、それらの谷間の傾斜部から平坦部にかけて安室と桃原の集落が形成されているが、運玉森のすそに位置する桃原しじで両部落が分断されている。

安室は、集落の東側が高台であるために家の向きは大半が西向でヒナ段状になっている。桃原は、ウチュー森を背にして東向きに家が並んでいる。

池田は、運玉森と刻時森との谷間にあり、池田公民館附近(上池田原)の盆地部に住宅が密集しているが、平安佐周辺にも十軒あり、そのほかに県道一五五号線沿に散

在するようにして住宅がある。安室桃原と池田は、運玉森と御茶多理森で大きく分断されている。池田の西方には弁ヶ岳があり、池田の地形は、盆地状になっている。

明治三十六年に現在の県道一五五号線ができるまで下知田坂(その一部は豆腐小坂という)が安室桃原から首里に抜ける唯一の通行路であった。

運玉森のふもとには、桃原と池田の地番を中心に十三万七千坪(四一・九一ヘクタール)の広大な敷地に新沖繩観光開発KKが十八ホールを有する本格的なゴルフ場をつくり昭和三十八年十二月から営業をはじめ、地元の雇用にも大きく貢献している。桃原の恩玉、湧原、池田の礪川原、陸門、宇川志、我謝の前川、上の川にまたがっている。

桃原

がでてくる。明治、大正、昭和にかけて三代鍛冶屋を続けていたというが、現在崎間家は、佐敷町字仲伊保に移り、部落内には神家だけが残っている。

部落内では、与那城姓、城間姓、喜屋武姓が最も多くその三姓で約七〇%を占めている。

桃原は、桃原、湧原、恩玉原の三つの小字からなる部落で集落が桃原にある。部落の南側の丘陵部にさとうきび畑が連なり、運玉森のふもとには沖繩カントリークラブになっている。面積は一九万七、〇七五平方メートルである。

古代マキヨ時代には、恩玉ノ嶽周辺に集落を構え、狩猟と農耕を行っていたと思われるが、十七世紀後期に現在の桃原に部落移動を行い、部落名を「桃原」と呼ぶようになったであろう。最初は桃原しじ周辺にいたが、後に上ヌ毛周辺に移った。恩玉周辺にいた頃は部落とはいえない小集落であったろう。

桃原(トウバル)とは、「平坦な場所」の意味であり、現在の集落が位置する小字名をそのまま部落名に採用したものである。

桃原は、地の利が悪い上に、農耕地が少なくないので戦前は移民が多く、戦後も部落外へ出て行った方が多い。

部落内では、喜屋武姓が最も多く全体の約四〇%を占め、その次に与那城姓、安谷屋姓が多い。

池田

かつて、この辺一帯は「ヘンサスク」、「ヂチンタ(下知田)」などと呼ばれていた。面積は、一八万九、八三〇平方メートルである。最初にここに移り住んだのはヂ

チンタナーデーラ(下知田宮平)一族で、桃原の仲間から分家してきた。地元では「花打ち宮平」とも呼ばれ明治末ごろすでに綿打ちに従事していた。

廃藩置県(明治十二年)前後に首里の士族らがこへ田舎下りしてきた。最初こへ来たのは約一五〇年前に一万坪余の御拝領地を賜った島袋家である。その後、続々と他の士族らが移り住むようになった。つまり池田は屋敷集落として発達してきた。

このような一時的な仮住いの生活がしだいに定着するにつれ、地元で新しい生活環境を築くようになった。

池田はヂチンタビラを境にして上合と下合に分かれ、下合はヂチンタとも呼ばれていた。昭和七年に一行政区として独立するまで、葬式や原山勝負などの行事は下知田青年会が中心になって取り行っていた。

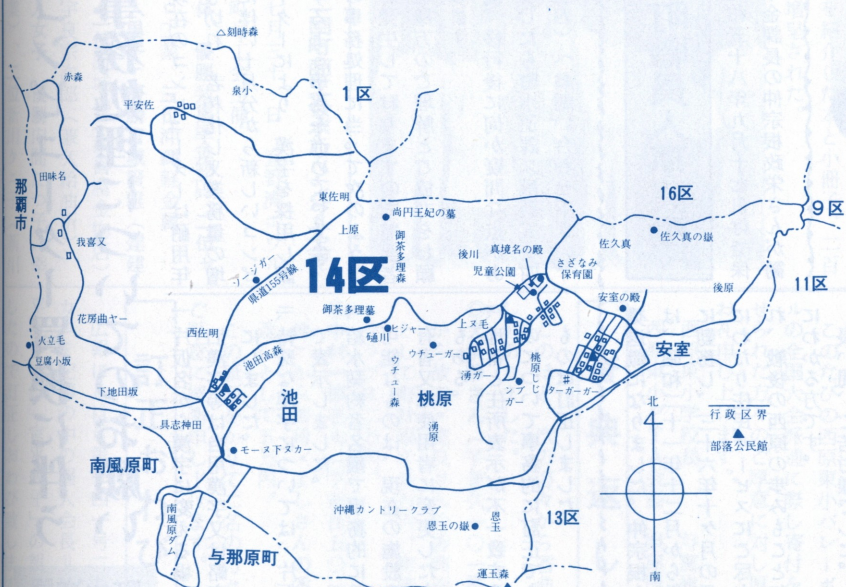
運玉森

本町の南側、与那原町との境界にまるで富士山のミニチュア版みたいな山がある。それが俗に西原富士といわれる標高一五八メートルの運玉森である。

運玉森は西原町のシンボル(象徴)として、校歌や町歌などに取り入れられている。真赤な夕日が運玉森の彼方に沈んだ時のあざやかな稜線はとても美しい。

沖繩の人で運玉森は知らない人も、運玉森を知らない人はいない。何回となく「運玉森」は沖繩芝居で上演されている。沖繩版鼠小僧次郎吉こと運玉森留の最後の地がこの運玉森であるという。(次面につづく)

14区の概観図



沖繩戦においては、この運玉森で一ヶ月余にわたり日米両軍の必死の攻防戦が展開された。そのために終戦後は、夏になると不発弾の自然発火で何回となく山火事が起きた。戦前は、頂上から中腹まで茅が茂り、中腹に松林があった。現在、町では運玉森にかつての緑を取り戻そうと大規模な植林事業を行っている。沖繩カントリ事務所から東側のゴルフ場内に恩玉の御嶽があった。

チチンタビラ

池田一二四番地の野国昌象さん宅前から首里無線中継所付近までの約六百メートルの急勾配の坂道を俗にチチンタビラと呼んでいる。明治三十六年に、その迂回路として花房曲ヤ（現在の県道一五五号線）を造るまで、首里へ登る唯一の道路であった。

（知事）一行が西原間切番所を訪れた時にも、このチチンタビラを下ってきた。一行は鳥小堀村（現在の鳥堀町）を経て、弁ヶ嶽前を通り雨の後だったので、膝まで泥につかりながらこの羊腸のように曲りくねった坂道を下った。旧藩時代の西原の人々がいかに苦勞して首里へ登ったかがうかがえる。



▲花房曲ヤーから眺める池田部落の中心地。



▲桃原から眺める運玉森の全景、西原富士といわれ西原のシンボルである。

町議会だより

九月二十七日より七日間の会期で昭和五十八年第三回西原町議会定例会が開催された。

提出された案件は、議案九件、認定四件であり、全ての案件は原案どおり可決された。又十一名の議員による一般質問も行われた。

※議案

西原町税条例の一部を改正する条例について

特別土地保有税に関する経過措置等の改正がなされた。

西原町国民健康保険税条例の一部を改正する条例について

所得の低い世帯に対し保険税の減額がなされた。

工事請負契約締結について

工事名Ⅱ西原運動公園進入路及び敷地造成工事

契約金額Ⅱ二億五〇〇万円。

契約の相手Ⅲ三善建設株式会社と有限会社徳田建設

工事請負契約締結について

工事名Ⅱ与那城安室線道路改

良工事

契約金額Ⅱ三、八〇〇万円

契約の相手Ⅲ有限会社東洋建設工事請負契約締結について

工事名Ⅱ内閣小那覇線道路改

良工事

契約金額Ⅱ六、〇〇〇万円

契約の相手Ⅲ有限会社東洋建設

昭和五十八年度西原町国民健康

保険特別会計補正予算について

歳入歳出予算にそれぞれ一、五

七三万一千円を追加し、予算の総

額を五億九、三六七万六千円とし

た。

昭和五十八年度西原町水道事業

会計補正予算について

収益的収入に二、五四一七千

円を追加し、三億一、六四六万一

移民

的収入に二〇〇万八千円を追加し

一億二、一五七万二千円とし、資

本的支出に一〇三万九千円を追加

し、一億四、六〇八万九千円とし

た。

昭和五十八年度西原町一般会計

補正予算について

歳入歳出予算にそれぞれ九、〇

四六六万六千円を追加し、予算の総

額を三六億六、三五四万六千円と

した。

学校事故に関する和解等につい

て

※認定
昭和五十七年度西原町国民健康
保険特別会計歳入歳出決算認定に
ついて（認定）



14区事務担任者
与那城 盛弘

▽人口Ⅱ六九八人（今年八月末）
▽世帯数Ⅱ一六二〇面（一・九六〇六平方キロメートル）▽人口密度Ⅱ三五六人▽耕地面積Ⅱ二九・一五ヘクタール▽さとうきび生産Ⅱ二、九〇九トン▽事務担任者Ⅱ与那城盛弘▽老人クラブ会長Ⅱ喜屋武眞▽婦人会長Ⅱ知念信子（安室）、仲田幸子（桃原）、儀間美智子（池田）▽青年会長Ⅱ喜屋武安則（桃原）、

神谷厚広（池田）▽区長Ⅱ与那城盛弘（安室）、玉那覇善永（桃原）、宇久田朝秀（池田）▽旧跡・拝所 恩玉の御嶽、佐久真の御嶽、安室の殿、真境名の殿、平川ヌ下ガ、ンブガ、御本礎、豆腐小坂、花房曲、

のトップクラスである。本町の最長老の安谷屋長貞さん（九十九才）も契約移民として三ヶ年間ペルーのパラモンガきび耕地で働いたという。昭和三十九年九月頃に八世帯（六〇人）を数え、町出身の約六・三%を占めている。

池田では明治末期ハワイへ田場樽氏、喜屋武善吉氏等十名が移民した。大正期にブラジルへ三名、ペルーへ五名が移民した。昭和初期になると南洋へ十名、フィリピンへ五名が送り出された。フィリピンへ渡っていた田場盛一氏は、フィリピンでの果樹園経営の経験を生かして戦後帰国し、池田でバナナ、トマト等の栽培普及に努めた。

門中

安室では、国元で約三五〇年前に住みついたと云われる安室大主の子孫である崎間（古くは与那城姓、崎間姓、現在は部落内には一軒もない）、佐敷村津波古から来たと云われる下庫理門中（与那城姓、喜屋武姓）、内間の糸数門中の分家仲西門中（城間姓、桃原の与那城姓）、桃原の下門門中の田崎（与那城姓）、我謝の宮平腹の分家約二百年前に来た宮平（宮平

姓）、首里から約一六〇年前に来た宇久（金城姓）などがある。その中でも下庫理門中と仲西門中が多い。

桃原では、最も古いとされている下門門中（喜屋武姓、安室では与那城姓、池田では宮平姓）と大宮平門中（宮平姓）、約二五〇年前内間の糸数門中より分家して来た大安谷屋（安谷屋姓）、安室の仲西門中の与那城（与那城姓）、小緑の垣花から来た大屋（上原姓）などがある。部落内では、下門門中が最も多い。

池田では、桃原の下門門中の分

れで一五〇年前に移り住みふとん

製造業をしていた下知田宮平（宮

平姓）、一五〇年前に首里王府か

ら一万坪余の御拝領地をもらって

首里池端からここに住むようにな

った土族島袋、その後首里から来

た土族田場、明治八年頃首里島堀

から来た土族比屋根、平安佐に

来た土族神谷などが古いとされて

いる。そのほか、一二〇年前に恩玉

に住むようになり五七年前から池

算額二億六、六七二万九、九二八

円、収益的収支の純利益二、一〇

四四四、六三七円とした。また、

資本的収入決算額一億二、二七〇

万円、資本的支出決算額一億三、

四五六万九、二七二円とし、資本

的収支差引不足額一、一八六万九、

二七二円は、当年度損益勘定留保

資金九万八、二七二円と過年度損

益勘定留保資金一、一七七万一千

円で補てんされた。

昭和五十七年度西原町一般会計歳

入歳出決算認定について（認定）

歳入決算額三億八、七五五万

六、五三七円、歳出決算額三億

六、八六三万九、八七六円、歳入

歳出差引残額八、八八七万六、六

六、五三七円、歳出決算額三億

六、八六三万九、八七六円、歳入

歳出差引残額八、八八七万六、六

六、五三七円、歳出決算額三億

六、八六三万九、八七六円、歳入

歳出差引残額八、八八七万六、六

六、五三七円、歳出決算額三億

六、八六三万九、八七六円、歳入

歳出差引残額八、八八七万六、六

六、五三七円、歳出決算額三億

六、八六三万九、八七六円、歳入

寄付お礼

九月十九日、字兼久一〇〇番地

の大城孝敏さんから米寿祝を迎え

られたお礼のため、町社協に十万

円、町老人クラブに十萬円の寄付

がありました。

昭和58年度町県民税第3期 納期は10月31日までです。
昭和58年度国民健康保険税第4期

我謝の獅子頭四代目完成 拝所の落成と獅子頭復元を祝う

我謝(呉屋賀真区長)では、昭和二十六年に製作された獅子頭の五七番地の玉那覇清徳さん(西原中美術科教諭)の手によって四代目の獅子頭が完成し、九月二十一日(旧暦八月十五日)の夜、見事に獅子舞が復活した。昭和三十八年以來二十年ぶりの復活である。



▲9月21日夜、20年ぶりに我謝獅子舞復活
(写真は銀バス終点大田良ムイで)

我謝の獅子舞は、無病息災と五穀豊饒を祈願する行事であり、獅子頭は部落の守護神である。時代は定かではないが、旧藩時代に首里から習ってきたものと考えられる。獅子舞は、旧暦の七月十五日から十七日までと八月十日から十五日

まで行われるのが慣しである。この日は、事務所を出発し、はじめに我謝の根屋である上神謝、その後、ノロ家である我勢頭に勇壮な舞いを奉納した。あまりの勇壮さに子どもが泣き出す光景もあった。三代目の獅子頭は、昭和二十六年に我謝の小橋川華功氏と平良順吉氏によって作製され、九月十八日の移魂の日まで事務所に保管されていた。四代目は、玉那覇さんが、精魂こめて一年半がかりで完成させたもので樹令四十年のデイゴを素材にした一刀ばりである。琉球漆器組合によって顔の表面に二十五回も漆が塗られた。髪は馬のしっぽの毛、胴体は、芭蕉糸でおおわれ威風堂々としている。

老人ゲートボール大会賑わう 総合力に優る四区Bが優勝

今や老人のゲートボール熱は日増しに高まり、雨天の時もカップを着け練習する光景も見られる程にブームを呼んでいるが、町老人

クラブ連合会(呉屋幸夫会長)主催の第二回町老人ゲートボール大会が、九月十二日午前九時半から兼久広場で行われ、町内十三の区



▲炎天下の中、はりきって競技を楽しんだ。

から十六チームが参加し大賑わいだった。各チームの選手は、カラフルなトレパン姿に帽子をかぶり炎天下の中スティックを握りはりきって競技を楽しんでいた。

競技法は、一チーム五人の選手が出場し、相手チームの五人と交互に各選手が決められた木製のボールをスティックで打って第一ゲートから第三ゲートまでの各ゲートを通過させ最後にゴールボールに当てて得点を競うゲームである。各ゲートの通過はそれぞれ一点が加えられ、ゴールボールに当てると二点が加えられ一人で最高五点が得点できる。制限時間内のチームの総得点で勝負が競われた。予選リーグ戦で選ばれた六チームで決勝リーグが行われ、全勝が二チームだったため優勝決定戦で四区Bが五区を下し優勝した。

一人住まい老人激励会賑わう

披露された。我謝の拝所(殿)は、西原ハイツの宅地造成に伴い元の獅子屋跡に昭和五十七年六月に完成させたもので、上又殿、中又殿、下又殿の三つの火神を合祀している。



老人福祉週間にちなみ、一人住まい老人の孤独感を解消し、老人の方々に皆で激励しようと町社協(宮平吉太郎会長)主催の第二回一人住まい老人激励会が九月二十

二日午後二時から町社会福祉センター大広間で行われ大賑わいだった。今回は、西原ライオンズクラブ(渡慶次道典会長)のご厚意により仲田幸子シヨも催されたほか、小橋川善弘琉球古典音楽研究所の皆さんの奉仕により古典音楽が披露された。老人クラブによる舞踊もあり、老人の方々は、民生委員と地域ボランティアの皆さんが調理したオードブルを頬張りながら余興を観覧し愉快な一日を過ごした。関係者約二百五十人が参加した。

- 尚、今大会の成績は次の通り。
- 優勝 四区Bチーム
- 準優勝 五区チーム
- 三位 十六区チーム

町慰霊祭のお知らせ

今年も、来る十月二十八日(金)に西原の塔で、町主催の慰霊祭が、町遺族会の協力を得て行われます。

日露戦争以来、今次大戦にかけて戦没され、西原の塔に合祀されております七千余柱の御霊のご冥福と恒久平和を祈念して

北部疎開の記録のため 大川、三原、汀間、瀬嵩を調査

町史の戦争編の編さんのため、町史編さん委員会(仲宗根英輝委員長)では、九月八日午前八時半から北部疎開調査を行った。調査団は、町史編さん委員、町職員、元役場史員、疎開体験者など総勢二十一名。昭和二十年二月二十八



汀間の避難小屋跡周辺を視察調査しているところ

調査の目的は、体験者の証言をもとに疎開した場所の確認と現場の写真撮影及びその証言を録音で収録することであった。町職員がテープレコーダー二機、カメラ二機で録音と写真撮影を行った。

大川の避難小屋跡、三原のゲイマタ、道江垣、志根垣、汀間の避難小屋跡、瀬嵩公民館近くの避難収容されていた屋敷跡などを見て回った。

北部疎開の場合、概して食糧事情が悪く言語に絶するほどの苦難の連続であったという。ソテツや草の葉まで食べたという。特に、収容所があった瀬嵩では、終戦から西原に帰るまでの一ケ年余の収容生活は悲惨を極め飢餓とマラリアで死者も続出したという。

文献紹介 短歌で綴る沖縄戦

玉那覇文彦著



玉那覇文彦氏

字小那覇二八六番地の玉那覇文彦さん(五六才)著の沖縄戦の体験をもとに戦後間もなく書きしるしていた手記や短歌七百首を挿入した戦争体験記「短歌で綴る沖縄戦」が九月十日に自費出版され、このほど一般に公開されることになった。

「上陸前後」、「島尻南端へ」、「前線描写」、「生と死の狭間」、「捕われの日」、「静風の日々」の六章からなるB六版二七六ペー

